

## 2019年度英語学科教育実習生10件の実地授業観察からの教訓

### Lessons from the On-Site Observation of 10 Practice-Taught Classes

by 2019 English Department Students

静 哲人

Tetsuhito SHIZUKA

Key words: 英語科授業, 教育実習訪問, 英語の歌, グルグル, フィードバック

#### 1. はじめに

大東文化大学英語学科では例年20~30名が教育実習を行うが、その期間中に教科教育法担当教員2名(筆者と淡路佳昌准教授)が分担して実習先を訪問し授業観察および実地指導を行う(静, 2018)。本稿では2019年度前期の訪問実習を終えての振り返りを報告する。

#### 2. 実習にいたるまで

教育実習は4年次に行う。3年次後期の「教科教育法(英語)応用B」は実習の要件科目であるが、本学科ではこの科目を修得すればそれだけで教育実習に行けるわけではない。それに加えて以下で説明するJRAにパスし、実習直前トレーニングに参加することを義務付けている。2019年度に関しては淡路准教授が長期在外研究で日本を離れたため、JRAまではふたりで、その後の直前指導および訪問指導は筆者のみで計画・実施した。

##### 2.1 レディネス・アセスメント: JRA

JRAとは実習レディネス・アセスメントのアクロニムであり、英語学科として「教育実習」を履修する要件として合格を義務付けているスクリーニング試験である。3年時科目の「教科教育法(英語)応用B」が修得できたとしても、このJRAに合格しなければ教育実習に行くことはできない。実習生の質保証のために2016年度から設けた「関門」である。実習に行く年の2月中に実施する。

残念ながらこの関門を通過できない学生が例年若干名出る。3年間教職課程を履修してきてすでに実習校も決

まっているこの段階の学生に「引導を渡す」のは重大な決断である。しかしながら、複数回精査した結果やはり現状では規定のレベルに達していないと判断される学生を実習校に送り出すことは、大学の責任としてやってはならぬ、という認識のもと、慎重かつ厳格に行っている。

中学・高校の英語検定教科書の各1ページ程度を音読しそれぞれについて3つ内容に関する質問とその答えを言う、という課題を与え、その発音の質および発問の文法的正確さや内容的確さについて、我々担当者が評価する。2016年度は実際に学生を集めてリアルタイムでパフォーマンスをさせたが、2017年度からは録音音声ファイルを提出させてそれを評価している。

第1次評価として淡路准教授と筆者が独立してABCの3段階で評価する。どちらかの評価がAである学生はその段階で合格となる。(我々の評価が2段階離れることは事実上ないので、一方がAなら他方はAかBである。)次に、追加の課題で再評価するフォローアップ対象の学生を選ぶ。今回は二人の評価がBとBだった6名と、BとCだった1名の合計7名をフォローアップ対象とした。

この7名に対しては改めて資料1のような課題を出し、筆者が「メール・グルグル」(静, 2019)方式で発音面を担当し、淡路准教授が発問面を担当した。結果として7名のうち6名が通過し、すでに合格していた21名と合わせて合計27名が晴れて教育実習に臨む資格を得た。

##### 2.2 直前トレーニング

JRAを通過して正式に教育実習に行くことが決まった

学生に対して4月に入ってから学科として授業外の直前トレーニングを行う。過去には、前期授業開始前に2日間のべ6時間程度実習生を集め対面で指導したこともあったが、正式の授業ではないため全員が都合を調整して参加することは難しかった。そこで2019年度は筆者単独で担当することもあり、(1) Google Driveに置いてある過去の実習生の授業ビデオを個別に視聴してレポートを提出させ、(2) 筆者が英語教員用に作成した授業方法DVDを視聴させる、ことで直前トレーニングとすることにした。(1)については表1に、(2)については表2に指示の詳細を示す。

表1 授業ビデオ視聴課題を指示したメール(2019.3.27)

<教育実習事前指導(英語) 授業ビデオ視聴課題>  
 要約: 以下のリストの授業ビデオを視聴し、「修正再現シート」の「起こったこと」の欄および「この授業から教訓とすべきこと(Do's and Don'tsを箇条書きに)」の欄に記入したものを、提出する。

- 各自、最低限、3つ選んで観ること。
- 可能な限りPC画面で観ることをおすすめします。
- その3つの中の一つは必ず、MT(中1)であること。  
 ←これまでの大東の教育実習生授業のなかでベストです。
- 中学に実習に行く人は中学2つ+高校1つ観ること。
- 高校に実習に行く人は高校2つ+中学1つ(=MT中1)を観ること。
- それぞれのビデオには指導案および教材がついています。当然ですが、DLして参照してからビデオを視聴すること。
- 「起こったこと」の欄は、自分であとで思い出せる程度の詳しさを記入。細かすぎず、大雑把すぎず。
- 「教訓とすべきこと」の欄は、自分の教育実習に向けての戒めのつもりで。
- 提出期限: 4月8日(月)22:00  
 (中略: ファイル名の指示など)
- 修正再現シートの提出は上のように最低限の3つで構いませんが、その他のビデオも実習開始までにすべて見て、私のコメントをよく理解しておいてください。  
 <視聴ビデオのリスト: 略。中学授業のビデオ4つと高校授業のビデオ3つを指定)

表2 DVD視聴を指示するメール(2019.4.16)

教育実習にむけてのイメージトレーニング, アイディア

の収集のため、私が作成・出演した英語授業DVDの視聴を勧めます。

すべてのDVDは、2号館6F「英語学科自由研究スペース②」においてあります。(中略)いろいろなアイディアが詰まったおもしろいDVDなので、活用してください。

実習開始までに、最低ひとり通算1時間程度は視聴に行ってください。視聴したら、その旨、私にメールで事後報告をお願いします。

<静作成 英語授業関係DVDリスト>

- (1) 英語発音の達人ワークアウト「English あいうえお」(ジャパンライム)
- (2) 英語授業の3形態: 一斉, ペア, そしてグルグル(ジャパンライム)
- (3) リズムで体感! 重要構文 ABCから仮定法まで(ジャパンライム)
- (4) 英語は英語で、そしてリズムカルに教えよう(ジャパンライム)
- (5) 音ティーチング授業DVD(アルク)

実習予定者の全員が(1)の課題を提出し、(2)の完了の報告をしてきた。

### 2.3 最終メッセージ

実習が目前に迫った5月上旬、最終メッセージをメール配信し(表3)、実習ですべきことを改めて指示した。

表3 Do's and Don'tsを再確認したメール(2019.5.10)

いよいよ実習が始まる時期になりました。あらためて私からのメッセージを伝えておきます。

- (1) 指導教諭の方針に従ってください。文法訳読をガンガンやるようにいわれたらそれをガンガンやってください。それも勉強になります。
- (2) しかし指導教諭の同意が得られるようなら、ぜひ歌をやってください。実習期間を通じて1曲歌えるようにする、とかでいいでしょう。帯活動的に毎回5分とかもできます。歌の力はやはり偉大で、君たちが去った後、生徒たちはその歌とともに君たちのことを思い出します。
- (3) 指導教諭の同意が得られるようなら、ぜひ、グルグルにチャレンジしてください。生徒ひとりひとりの素の顔が見えます。眼の前50センチで展開する1対1の

感覚を、今度は教師の立場で体験してみてください。

(4) 生徒に発表させたら絶対に「もっとうまくなるためのフィードバック」をしてください。そして実際に「もっとうまく」してください。ありがちな、「授業の最後に2～3人(ペア)を指名して、下手くそ～な発表をさせて拍手しておわり」だけは絶対にやめてください。

そういうのを授業の最後にせず、発表は授業の中盤にさせて、下手くそであることをきちんと指摘して、また練習にもどし、授業の最後にはすこしでもマンな状態にして、「さっきよりうまくなったね」という本当の意味の拍手をして終わってください。

(5) 教え方はいろいろあっていいですが、「1時間終わった時の目標の状態」をいつも意識し、それを目指してください。「1時間終わった時には、この本文を、適切な発音とリズムで、全員が本文を見ずに言えるようになっていくこと」が目標だとします。そうであれば授業がおわる最後の1分、最後の1秒まで、その目標の達成のために努力してください。「指導案の予定が終わったから、やる事がなくなった」なんて馬鹿なことはゆめゆめ思わないように。

昨年の実習生で、終了5分前に「時間があまったから～を出して」という発言をした者がいて、私はめちゃくちゃ怒りました。「時間があまる」なんてことは絶対にありえないはず。全員が充分うまくなっているのか？そうでないなら、なにをすればいいのか、を最後の最後まで考えてください。

まず(1)として、実習生が板挟みになることを防ぐため、大学で学んだことと指導教諭の方針に乖離がある場合には後者に従うよう指示したが、具体的な行動目標はその後の4つである。(2)の投げ込み教材として歌を扱うこと、(3)のグルグルを実施してみることは努力項目として挙げた。(4)生徒の発する英語の音声的クオリティに対して明示的な訂正フィードバック(以下FB)を与えること、(5)授業のスキル上の到達目標を常に頭に置いて照らして指導すること、は必須項目として挙げた。(2)～(4)はいずれも2年時科目「教科教育法(英語)基礎A・B」の主教材である『英語授業の心・技・体』(静, 2009)の中核的命題であり、3年時の「教科教育法(英語)応用AB」でも重視されていたことである。

### 3. 実習訪問の開始

以上の過程をへてようやく前期の実習期間が始まり、訪問を開始した。訪問指導にあたって配慮・考慮してい

たことは以下の通りである。

#### 3.1 いつ訪問するか

20数名の実習時期はほとんどが5月から6月に集中する。自らの大学の授業を休講にして出張することはしないので、大学の会議や授業のない曜日、時間帯のみを利用することになる。すると時間割上、出張可能なのは教員一人あたり週にせいぜい2日である。前期の実習が5月の第4週から6月第3週まで4週間にまたがっているとすると、その期間中で潜在的に可能な出張日は教員1名あたり8日間(2日間×4週間)である。

ただしその潜在的出張可能日に当該の学生の実習授業が都合よくあるとは限らない。学校行事のための授業なし、ということもある。仮に運良くあったとしても実習期間の中のいちづけとしてその日の訪問が適当であるとは限らない。授業をまだほとんど経験していない段階で訪問するのは実習生には酷であるし、また指導の効果も薄い。逆に実習の最終日に訪問するのでは、指導したとしても、その指導を活かして修正して実施する授業自体がもうないため、あまり望ましいとは言えない。理想的なのは第2週の後半から第3週の前半あたりで訪問し、指導し、その指導を活かした授業をその後も数回は経験して実習を終えてもらう、というものである。

以上から明らかなように、訪問指導は必ずしも実習校側が設定する「研究授業」に合わせて行うわけではない。あくまでこちらが物理的に訪問可能ななかで最も指導効果が見込めるタイミングでやらせていただくものである。

#### 3.2 誰を訪問するか

前述の条件を考えると20数名の実習生全員を訪問するのは残念ながら物理的に不可能である。そこで誰を訪問するかを決める必要が生じる。訪問指導は教職課程センターからの出張として行うものであり、対費用効果も考えねばならない。結果として教職課程センターの教職セミナーに参加している学生を中心に、教員志望度の強い学生および参観を特に強く希望する学生を選んで訪問することになる。(なおこの他に、当該学生の所属するゼミの教員が訪問するケースも毎年数件程度ある。)

その際、当然実習先の地理的条件も考慮すべき要因になる。埼玉、東京を中心とした関東圏であれば日帰り出張、場合によっては大学の授業の前後に出張する半日出張も可能だが、100キロを超える遠方ではそうはいかない。本学科の実習生の出身地は首都圏に加えて関東甲信越、さらには東北や九州に及ぶ。年度によっては遠方出

身の学生の教員志望度が極めて強く我々の訪問指導を切望することがあり、それに応えるためには前泊や後泊が必要となることもある。

実際に直近の過去3年間では福島、青森、鹿児島に計5件出張した。その中の1件については担当者2名で訪問して指導し、その指導による授業の改善の詳細を論文として報告している（静・淡路，2017）。

### 3.3 ビデオ撮影

授業観察の際は、許されるならば是非録画したいところである。授業者本人が後から自分の教えている姿を客観的に見直して学ぶことも多い。加えて後に続く学年の教科教育法のまたとない貴重な教材になる。さらに授業方法に関する研究論文のデータになる（静，2016a；2017）

当該学生と調整の上、訪問日時が決定したら、実習校の管理職に対し当該授業のビデオ撮影の許可をもらえるかどうかを打診する。許可願い文書を作成しメールの添付ファイルとして実習生に送り、それを印刷して指導教諭を通じて提出させ、回答を待つ。

文書には（1）撮影にあたっては極力生徒の顔が映らないよう配慮すること、（2）撮影データは責任を持って保管すること、（3）撮影データは当該実習生および本学部の教員志望学生の指導にのみ使用することを明記する。

昨今、プライバシー保護の観点から一般的に学校現場でのビデオ撮影は難しくなってきたのはいるが、有り難いことに、ほとんどの場合は趣旨を理解していただいて許可を得ることができている。直近3年間で訪問した約30件中、撮影許可をいただけなかったのは1件だけであった。今回もお願いした10件すべての学校から撮影許可を得ることができた。

### 3.4 直後の講評

授業観察中はビデオ撮影をしながらメモをとっておく。授業終了後の流れとしては大きく分けて次の4パターンがある。（A）指導教諭も同席して授業検討の機会が持たれ、指導教諭が講評し、筆者も講評する。（B）指導教諭も同席して授業検討の機会が持たれるが、指導教諭は講評せず、筆者のみが講評する。（C）指導教諭は同席せず、筆者のみが講評する。（D）実習生の業務予定の関係で直後の講評の時間自体が取れず、筆者は授業終了後直ちに退校する。

不可抗力であるパターン(D)を除くと、私見では、(C) < (B) < (A) の順番で、指導教諭の自らの英語指導方針および実習生指導方針に関する信念や自信が強いという傾

向があるように思われる。そして率直に言って、その信念や自信の強さは、そのまま当該教諭の英語指導力の高さと連動しているという仮説を筆者は抱いている。

もちろん指導教諭は多忙であり、他の業務のため、外部からの参観者である大学の教科教育法担当者が講評する場に同席する暇がないこともあるだろう。しかしそれを差し引いても、パターン(A)すなわち教科教育法を専門にしている大学教員の前で自らの指導理念に基づく意見を開陳できる指導教諭は、比較的に深い見識と高い指導力の持ち主である可能性が高い。実際に筆者がこれまでパターン(A)で聞かせていただいた講評はすべて傾聴すべきものばかりであった。

パターン(B)と(C)ではそもそも指導教諭のコメントを筆者が聞く機会がない。よってパターン(B)と(C)の指導教諭について確信をもって評価することはできない。しかしながら指導教諭の立場からすれば、実習生のその日の授業の成否は、それまでの自分の指導の成否でもある。それについて第三者である大学教員と、同じ英語教師として10分でも20分でも意見を交わすことは、貴重な機会であるはずだ。その貴重な機会を、努力して時間を捻出してでも利用しようとしなないという事実は、その指導教諭について何かを語っているはずだ。事実、実習生からの事後報告というエビデンスは、前述した(C) < (B) < (A) という不等式が成り立つという仮説を支持する。

### 3.5 講評にあたっての配慮

パターン(C)は客観的な状況として望ましいことではないが、講評する筆者からすると最も「気が楽」であることもまた事実である。なぜならばその場には当該学生しかいないわけなので、何を遠慮することもなく、それまでの大学での2年間の指導の延長として思うところを直截に学生だけに伝えればよいからである。

しかしパターン(A)と(B)はそうはいかない。それは単に自分の指導学生以外の聞き手がその場にいるから、というだけのことではない。その日に当該学生が行った授業はそれまで1週間ないし2週間、その指導教諭の指導をうけた結果の産物であるため、実習生の「作品」であるとともに指導教諭の「作品」である場合もあるからである。

実習生の授業のある特定の点がよろしくないと感じた時、「指導教諭もよろしくないと思っていてそうでない方向に指導してきたが未だにその修正が達成できなかった」という場合と、「その方向に指導教諭が導こうとしていた、あるいは指導教諭の普段の授業がそうだった

から実習生も真似した」という場合が考えられる。

たとえば数年前にある高校を訪問したときには、それまで我々が2年間の教科教育法で「やってはならない」と教えたことをすべてやっているような授業をしていた、というケースがあった。事後の講評には果たして指導教諭は同席しなかったので、学生に「今日の授業はこれまで大学で教えたことのまったく反対であることに気づいているか」と尋ねたところ、「もちろん気づいていますが、すべて指導教諭の方針なのでやむなくしたがつています」とのことであった。

これはやや極端なケースであったが、我々が教員志望学生を導こうとしている方向と、実習校の指導教諭が導こうとしている方向とが一致しないケースは決して珍しくない。それは現在の我が国の英語教育において「良い授業」「目指すべき授業」のあり方について意見の一致が事実上みられていないということの反映であろう。

授業中の英語使用頻度ひとつとっても「一切日本語を使わず英語で説明せよ」という学校もあれば、「授業中は生徒に負担をかけないように、音読などはさせてはならない」という筆者には理解しがたい方針で授業している学校もある。和訳に関しても「和訳のプリントは配布してはならない。和訳は授業中に一文一文丁寧にやるのだ」という学校もあれば「和訳は先渡しして時間を節約し授業中は表現活動に時間をかけるべきだ」という学校もある。

文部科学省がいくら「英語の授業は英語で行うのが基本である」「対話的で深い学びを」と叫ぼうが、教育現場の現実のベクトルの方向はひとつにはなっていないし、予見可能な将来、そうなることもないだろう。

よって講評に当たっては、それまで実習生から得ていた情報に加え、その場での指導教諭の態度や表情を観察しながら慎重に言葉を選ぶ必要がある。ただし「慎重に」とは、かならずしも指導教諭の方針に沿わないコメントを避けることだけを意味しない。たとえば実習生からのそれまでの報告で、その指導教諭が発音指導を軽視しているタイプの教師だとわかっている場合などは、その場で実習生に対して「発音指導をもっと明示的に行うべきだった」という趣旨のコメントをすることによって、学生に向けてという形をとりながら実は指導教諭にむけてメッセージを送る、という場合などもある。

いずれにせよ大学から訪問させていただく身としては、できるならば事後の協議に指導教諭も同席していただき、率直に意見交換をさせていただければ理想的であると考えている。

#### 4. 2019 前期の実習訪問

例年はひとりおおよそ5件、ふたりで計10件ほどの訪問をしてきたが、今回は筆者ひとりで前期に10件の訪問を行うことができた。たまたま今年の前期には遠方の実習校がなかったためである。

表4に10件の概要と筆者の寸評をまとめた。すべて中学で1年が3件、2年が5件、3年が2件である。扱われた主たる文法事項・題材は、1年がすべてbe動詞、2年がすべてwillあるいはbe going toを用いた未来表現、3年は2件でそれぞれであった。

以下でまず、2.3の最終メッセージの内容がどの程度実現されていたかを整理する。

##### 4.1 歌

歌は10件中9件の授業で扱われており、そのうちの7件がすべてミュージカル映画 Sound of Music の挿入歌 Do Re Mi である。Do Re Mi は「教科教育法（英語）基礎」の中でも練習した曲のひとつである。また2.2の直前トレーニングで筆者が「過去の大東の教育実習生授業のなかでベスト」として全員に視聴を義務付けた「MT(中1)」も用いていた曲であったことも影響したと思われる。もう1件はBeatlesのHello Goodbyeであるが、これは当該校でもともと毎月歌を題材にした帯活動をやっていたものを実習生がそのまま踏襲したものである。最後の1件はOne DirectionのOne Thing であるが、これは当該実習生が大学1年時の「英語教育学入門A」(静, 2016b)の中で練習したものである。

9件のうちOne Thing 以外の8件では歌は「本時」の主たる文法事項・題材に入る前の活動として扱われていた。One Thing だけは実習最終日に「何をやってもよろしい」という許可のもと当該授業50分すべてをこの歌の練習に当てたものとなっていた。

いずれにしても10件中9件と、ここまで歌の使用率が高かったのはかつてないことであり、本年度の実習生の積極性の反映だと思われる。肝心の指導状況も、教員のモデル発音・歌唱のレベル、コーラスリピーティングのさせかたの巧拙、その結果としての生徒の発音・歌唱のレベルに関して、ほとんどの学生が満足なパフォーマンスを見せたと判断する。

##### 4.2 グルグル

グルグル(静, 2009)とは、通常の一斉授業形態をガラリと変えて、一種の喧騒を作り出す指導法である。そのため生徒集団の統制に自信がない場合は現職教員でも

表4 観察した10件の授業の概要および寸評

	学年	主たるテーマ	歌指導と曲名	グルグルの有無と教室環境の調整	発表FBの有無	備考	直後の講評の有無とパターン
学生01	中1	Are you / I'm not	Do Re Mi	机前方に移動	あり	Eあ	D 時間取れず
	声質はクリアで、表情は明るく、音声指導は的確。グルグルでは生徒の顔を覗き込み、迫力がある。ただし自分で腰を折ってかがむのではなく生徒に顔を上げさせるとよい。発表に対するFBもおおむね適切である。						
学生02	中1	This is / That is	Do Re Mi	なし	なし		A 管理職と指導教諭が講評
	親しみやすい雰囲気は良い。しかし声が小さく「テンション」が低い。普段の日本語の話し方のプロソディを英語にもちこんでしまった結果、英語音声モデルとして不十分。導入した文法事項の場面に不自然さがある。						
学生03	中3	説明文を書く	Do Re Mi	机そのまま・生徒壁際	N/A	Eあ	B 指導教諭同席のみ
	威風堂々としていてよい。ハンドアウトの英語に誤りが目立つ。歌の指導に「照れ」が感じられる。一斉指導が不十分なままグルグルに入ってしまった結果、一人にかかる時間が長くなり、活動としてだらけた。						
学生04	中2	be going to 含む対話	なし	なし	なし	TT	A 指導教諭が講評
	全体の流れはよい。しかし生徒の音声に対するFBがない。ひとつひとつの文字が読めるようになるための指導、文が自力で読めるようになるための指導に関して改善の余地がある。TT形式に適した展開ができた。						
学生05	中1	be 動詞を使った自己紹介	Hello Goodbye	なし	あり		A 管理職と指導教諭が講評
	深みのある声がよく通り演技力もある。生徒の反応にあわせた臨機応変の対応ができる。復習とメインの活動がややずれていた。導入した文法事項も説明の例文が機械的で、語用論的に難があった。						
学生06	中2	One Thing を歌う	One Thing	予定したができず	N/A		D 時間取れず
	一斉指導時に生徒がうまく歌えない時、歌詞の音節とメロディの音符の対応を意識させると良かった。指導案通りに進まず苦しみながらも、プランを修正する力を発揮し、最後は辻褄を合わせて盛り上げに成功。						
学生07	中2	will/be going to 含むやり取り	Do Re Mi	机そのまま・生徒そのまま	N/A	Eあ	B 指導教諭同席のみ
	豊かな表情と役者ぶりが見事。グルグルでは逐一モデルを示してしまっていた。メインのペアワークは、be going to と will を使った文の操作に終始し、ふたつの使い分けが理解できないような活動となっていたのが残念。						
学生08	中2	will をもちいたやり取り	Do Re Mi	なし	N/A		C 筆者のみ
	生徒にリピートさせるタイミングが絶妙にうまい。歌の一斉指導はほぼ完璧。will を使ったメインの活動は自然な場面を設定できたが、生徒がすぐに暇になってしまうデザインになっていたのが残念。工夫の余地あり。						
学生09	中3	call AB を含む対話文	Do Re Mi	机後方に移動	あり・再発表	Eあ	C 筆者のみ
	元気な生徒をよくコントロールしていた。生徒発表を中盤でさせ、改善にむけたアドバイスをし、再び練習させて最後に再度発表させたのは素晴らしい。しかしアドバイスのポイントはややずれていた。						
学生10	中2	will を用いた疑問文と否定文	Do Re Mi	机前方に移動	N/A	TT	D 時間取れず
	発声に威厳があってよい。グルグルも効率的であった。スクリーンを効果的に使った。板書による説明が塾的で長すぎた。will を使う活動の場面がやや不自然であった。TT という形態を活かせていなかった。						
注) Eあ: English あいうえお TT: team teaching N/A: not applicable FB: feedback							

実施に躊躇することがあると聞く。ましてや実習生の場合には採用するのに心理的ハードルが高い指導法であることは間違いない。しかるに今回の 10 件の授業のうち 5 件でグルグルへの挑戦があったことは喜ばしいことである。歌と同じくグルグルに関しても史上最も高い実施率である。実習生の勇気と積極性を称えらるとともに、それを許可してくださった指導教諭の方々のご理解に対しても感謝したい。

なおもう 1 件 (One Thing 授業) でもグルグルは指導案に入っていたのだが、思いの外その前段階の一斉練習に手間取り、結果的に時間がなくなって実施できなくなったものである。なお、5 件のグルグルはすべて Do Re Mi の歌を題材としていた。すなわち歌を使用した 9 件の授業のなかの 5 件で、歌を一斉指導したあとにそのままグルグルに移ったということである。

肝心のグルグルの内容・方法・質に関しては、以下の課題が感じられた。

#### 4.2.1 練習不十分なままグルグルに入る

グルグルとは、一斉形式で十二分に練習し、一斉形式では満足なレベルで言えている (ように聞こえる) 学習者集団の集団を解体し、ひとりひとりの音声レベルをチェックしかつ訓練し、全員 (all ではなく each) の質保証を行うための仕組みである。よってグルグルに入るのは一斉指導ではそれ以上向上しないくらいまで繰り返し練習した後であるべきである。ところが、一斉指導が不十分な段階でグルグルを始めてしまう学生がいた。

#### 4.2.2 判定の前にモデルを示してしまう

十二分に一斉練習をしているならばグルグルのなかでは、もう最初に教師がモデルを示す必要はない。教師が自分の前に立った瞬間に生徒は発話を始め、発話の終了と同時に教師はその質を判定して伝えるのが原則である。

ところが実習生によっては、生徒の前に立つごとに、逐一自分で当該のフレーズを歌ってモデルを示すことから始めてしまうケースがあった。そのモデルを聞いてから生徒がリピートする、というパターンである。結果的にひとりにかかる時間が長くなり、グルグル全体のテンポが悪くなっていた。

緊張感のあるグルグルの目安としては、ひとりあたりにかかるのは移動を含めて 5～6 秒程度が理想である

(静・淡路, 2019)。その時の課題文を生徒が発話するのに 3～4 秒, 判定および指導に 1 秒, 移動に 1 秒である。

生徒に発話させる前に教師がモデルを示したくなる、

示さないと無理のように感じられるなら、それはすなわちグルグルに入る前の一斉練習が不十分だったからである。考えればすぐわかるように、同じモデルを各生徒に示すのは時間とエネルギーの大きい無駄である。

それ以上モデルを示したいという気持ちがなくなるくらい一斉練習でモデルを示し、いったんグルグルに入った後は、生徒が目の前に立った瞬間に発話を始められなかったなら、その瞬間に「不合格」と判定して次の生徒に移るくらいでないと効果的なグルグルは成立しない。一周回にかかる時間が伸びると「暇にする」生徒が出てきてしまう。実習生は概してこの点に課題があった。

#### 4.2.3 課題文を見せたまま歌わせる

Do Re Mi の歌詞シートを手元に持たせ、そのシートを見たまま歌わせていた実習生がいた。その結果何が起こるかということ、ほとんどの生徒よりも背の高い実習生のほうが中腰になって、あるいはしゃがみこんで、うつむき加減で歌う生徒の顔を下から覗き込むという無理な体勢になっていた。

グルグルは、Read and Look Up 状態で一旦課題文・フレーズを作動記憶に入れ、教師の目を見ながら発話するのが基本である。それにより生徒の口元がよく見えて指導しやすくなる。また生徒にしてみると課題文を一瞬でも覚えた状態で発話しなければならないため準備に時間がかかるようになり、教師が次に自分の前に来るまでの時間がより短く感じられるようになる。

#### 4.2.4 物理的環境を整えずに始める

グルグルを実施した 5 件には物理的環境の違いがあった。学生 01, 学生 09, 学生 10 では生徒全員の机を前方あるいは後方に固めて空いたスペースに生徒を円環状に立たせて実施したのに対し、学生 03 は生徒の机は通常の配置から動かさず生徒のみ壁際に立たせて、学生 07 は机はもちろん生徒も通常的位置から動かさずその場で立たせるのみで、実施したのである。

あらためて 5 つのビデオを見比べると机を移動してから実施した 3 件は他の 2 件より明らかにグルグル自体がスムーズである。4.2.2 でわかるようにグルグルにとってテンポの良さは本質的に重要な部分なのである。ひとりの生徒からつぎの生徒に移動するときに障害物がなくスムーズに 1 歩で行けるのと体をねじったり机を迂回したりしながら少なくとも数歩かかるのでは大きく異なる。ひとりあたりの差が数秒でもそれが 10 人, 20 人と累積すると無視できない差となる。

机を前方あるいは後方に移動するのに1分程度はかかる。しかしそれでも、その手間と暇をかけても机は移動するのがよいようだ。急がば廻れ、ということだ。

まとめると、今後の実習生にはグルグルは、(1)一斉指導を十二分に行った上で、(2)机は移動してスペースを空けてスムーズな動線を確認してから開始し、(3)あらためて教師はモデルを最初に示さず、(4)自分の番になった瞬間に生徒は必ず Read and Look Up で教師の目を見て発話を始め、(5)それができない生徒は不合格となるというルールとし、(6)ひとりできれば5秒遅くとも10秒以内を目標に実施するよう、徹底する必要があるというのである。

#### 4.3 個人発表での訂正FB

ここでいう個人発表での訂正FBとは、個人もしくはペアをその場に立たせてもしくは教室の前で発表させ、その音声的質に対して「ここが足りない」「こうすればもっとよくなる」という方向で与える具体的なFBのことを指す。一斉音読をしながら対象を明示しないで全体に対して与えるFBは含まない。また個人発表に対するものであっても単に「拍手!」「よくできた」という内容のないFBは含まない。

10件の授業の中でそもそも個人発表がなかったものは5件あり、残る5件で個人発表があった。そのなかの3件(学生01, 学生05, 学生09)でFBがあり、2件ではなかった。

##### 4.3.1 発表させたら必ずFBを

立たせての個人発表がない授業はあり得るし、あっても構わない。しかし筆者の考えでは、個人発表をさせながら訂正FBがない授業はあってはならない。静(2009)の「十五戒」の七に「生徒のパフォーマンスは常に評価してそれを伝えよ。どんな場合にも足りない点を見つけてダメを出せ。ダメ出しとはすなわち向上のためのヒントでありアドバイスである。評価のない発表は時間の無駄遣いと心得よ。」(p.202)と書いた通りである。

その発表が分節音もプロソディも非の打ち所がなく褒めるしかFBしようがない場合には訂正FBの出番はないだろうが、現実には日本の教室でそれはほとんどない。実際、今回FBのなかった2件の授業での個人発表の発話には、もちろん指導の余地は十分にあった。実習生はその指導の余地に気づけなかったのか、気づいていながら指導ができなかったのかは不明だが、いずれにしても残念なことである。

##### 4.3.2 発話を止めて指導する勇気を

まったくFBがなかった2件にくらべると、FBを行った3件はFBを行ったという事実によって高く評価される。しかし限界は、3件ともそのFBが事後的かつ間接的なものだったことである。

事後的であるとは、ある発表・発話が例えば10秒かかった時、開始3秒めに改善点があった場合にも、発話が全部終了するまで待ち、その後にアドバイスをしていたということである。しかもそれは発表に対して拍手をし、発表者が席に座ってから、あるいは席に戻ってから行われることが多かった。

しかし音声には産出されるそばから消えるという特性がある。発話全体が終了してしまってから、すでに何秒も前に発話して消えてなくなってしまった音声の質についてさかのぼって指摘されても、それを修正するのは至難の技なのである。改善すべき音が産出されたら、可能な限り間髪をおかず即時的に指摘してやって初めて発音習慣の変化につながる可能性がでてくるのだ。

間接的であるとは、その当該発表者・発話者を立たせたまま、あるいは教室の前に出したままの状態、当人に面と向かって「今のあなたの～の発音は～であるべきだった」と直接伝える形をとらず、いったんその発表に対して拍手などし、Thank you. Good! などと言い、発表者・発話者を席に座らせてから、あたかも一般論のような体裁をとって「～の発音は～こうですよ」と全員に向かって伝えていた、ということである。

また正しい音声はこうであるという事実を伝えた段階でFBを終わってしまい、当該の生徒にその場でもういちど発話させて、修正された音声を発話させるまでしなかった、ということである。発音はモータースキルなので、「～すべきである」という宣言的知識だけを与えても実際に修正されるかどうかはわからない。

生徒との人間関係が浅い教育実習では難しいのは理解できる。しかしそれでも(1)修正点を認識したらその瞬間に発話をとめ、(2)修正すべき点を伝え、(3)すぐにその場で修正された音声を産出させ(4)修正された音声を含んだ発話によって発話を終了させる、ことを努力目標とすべきである。

##### 4.3.3 中間発表と最終発表を

事後的かつ間接的なFBをした3件のうち学生09の授業には他にはない大きな特長があった。それは同一の発表者に授業内で2度発表させていたことである。授業の40分経過時点であるペアを教室の前に出して発表させ

た。その発表のなかのある単語の発音に対して修正 FB をし、全員にもういちど練習させ、45 分時点でさきほどと同じペアを指名して、もういちど前に出て発表させたのである。これは筆者が 2.3 の (4) で伝えたことを実践したものだ。

残念ながらこの時とりあげた発音上のポイントはその発表のなかでもっとも重要な点であったとはいえ、また 2 度目の発表でも目立つほどの改善が見られたとは言えなかった。それでもこの形の 2 段階発表を試みたことについて、その学生の勇気を讃えたい。

なお授業後、彼女に「2 段階発表はすばらしかった。欲を言えば FB を発表最中に、より直接的にしたらもっと良かった」と伝えたところ、この件について指導教諭からは

「発表最中に直すと、生徒が萎縮してしまい、自分から手を上げて発表しようという生徒が減るからやめるほうがよい」

という逆の指導を受けた、とのことであった。この指導教諭の言説には、自主的に手をあげさせることが目標なのか、生徒の英語をうまくすることが目標なのかに関して絵に描いたような本末転倒がある。そもそも発表者を選ぶ際に生徒の挙手によることは得策ではない場合が多い。人選に時間がかかることもあるし、人選も偏る。

即時的、直接的に発音指導することと、教室の雰囲気を良いものに保つことは、やり方によっては決して無理なことではなく、実習生であっても可能である。実際に 2011 年度に観察録画したある中 1 の授業ではまさにこれを実践し成功している。その授業の中のある場面では、ひとりの生徒を立たせたまま、その時の目標文が正しく発音できるまで 6 回言い直させ、最後は見事に正しく言えるようにして終わった。そして当該の生徒も周囲の生徒もその雰囲気を楽しんでいることが伝わってくる。

そこで実習生 09 にそのことを伝えた上で当該ビデオを見せたところ、以下の感想を寄せてくれた。

威厳があり、妥協せず、諦めないで教えようとする姿勢がとてもすごいと思いました。先生の発音を上手くしてあげたいという強い気持ちが生徒にも伝わっていて、生徒もそれに応えようとする雰囲気が自然と出ていたように感じます。

全員の前で立たせて 1 文ずつ言わせる活動は、生徒からしたらかなり緊張すると思います。ですが、そのよう

な個人指名でも妥協せず、正しい発音で言えるようになるまで、5 回も 6 回も妥協せずに繰り返し言い直させている所になるほどなあ〜と思いました。私の場合は、何回もやったらかわいそうだという気持ちが少しありましたが、この動画を見て、そのまま見過ごしている方がかわいそうだと確信しました。そのため日頃から正しい発音ができるまで、妥協せず、繰り返し指導するスタイルを定着させることが大切だと実感しました。

また発表したい人に挙手してもらうよりも、ズバズバ指名し、毎回の授業の中で全員当てるくらいの気持ちのほうに授業の進行的にも良いと感じました。全体を通して、同じ文を何回も発音指導しているけれども、小技や上手になるポイントを適切なタイミングで取り入れているから、生徒も飽きずに、上手くなろうとする空気感が全体に広がっていたように感じます。グルグルで丸をもらってガッツポーズする姿がとても印象的でした。常に厳しくしてなかなか丸を貰えないからこそ、できた時に感じる喜びだと思うし、その感情がもっと上手になりたいという主体性を引き出すポイントだとも思いました。

もう一度、自分の研究授業を見直し、次に繋げたいと思います。

大切な気づきがあったことがわかる。この感想は本人の同意を得て、来年実習に行く現 3 年生の「教科教育法（英語）応用 A」受講者全員にメールで配信した。

#### 4.4 主たる題材の扱いに関して

肝心の主たる題材の扱いに関しては、指導方法や段取りの巧拙というよりも、扱っている英語題材そのものに関する実習生の理解の浅さを感じる事例があった。

##### 4.4.1 現実的な意味・場面を無視した例文を出した事例

be 動詞の否定を導入する際、つぎのような矛盾した例文を用いた事例があった。

I am Taro Daito.

I am not Taro Daito.

いったいこの人物は大東太郎であるのか大東太郎でないのか。

Am I Taro Daito?

この質問は、自分が誰であるかの記憶を失った人物に発せられたものだろうか。

You are Sota Fukushi.

You are not Sota Fukushi.

結局“You”は富士蒼汰さんなのか、そうでないのか。またそもそも「あなたは富士蒼汰です」という発話は誰がどういう場面で用いることを想定しているのか。

このように意味や場面を無視し、単なる文法的な形式操作だけを教えようという態度は望ましくない。そういう姿勢が、文法的には正しいが使い方が妙な英文を言わせてしまうという4.4.2や4.4.3のような事例につながってゆく。

形式を教えるためであっても意味を可能な限り重視し、せめて次の例文程度には「ありえる」ものにしたい。

- I am not Ryutaro. I am Yutaro.
- Am I strange? / Am I wrong? / Am I pretty?
- You are from Saitama. You are not from Tokyo.

#### 4.4.2 This と That の使い分けが奇妙だった事例

This is～ と That is ～を導入した後のペアワークとして、「近く」に座っている生徒のことを This is (氏名) で、「遠く」に座っている生徒のことを That is (氏名) で紹介するという妙な活動をする事例があった。「どこまでが this で、どこからが that かの距離感が大事」などと説明し、2列程度離れている人については that を使う、といった指示をしていたようだがミスリードである。

教科書本文では話し手が隣にいる人物 A を聞き手に対して、This is A. と紹介し、その時すこし離れた場所においてかつこちらを見ていない人物 B のことを、That is B. と紹介している。その瞬間の「話の輪」の外にいる人物に対して That is を使っているのがポイントである。

この実習生の活動のように、その言及されている人物が話し手のほうを見ていようが見ていまいが、単なる物理的な距離が大きければ That is で名前を言う、といった活動では、This/That を使うべき場面を生徒が誤解する。この実習生自身の理解も足らなかったと思われる。

This is ... / That is ... を口頭で何度も言わせるための活動であれば、教師が大きく引き伸ばした写真を指し示しながら写真に映っているものを This is A. This is B. This is C. と言い、それを聞きながら生徒は That is A. That is B. That is C. と言う、あるいは教師が世界地図を指し示しながら This is A. This is B. This is C. と国名を言ってゆくの生徒が That is で繰り返す、などが考えられる。同様なことをペアワークでもできるだろう。

#### 4.4.3 will と be going to の使い分けが不自然な事例

自分の未来の行動について話す時、基本的にはその場

で思いついたことがらには will を、すでに予定していることがらには be going to を使う。しかしある実習生は明らかにすでに予定している特別学習について生徒に Where will you go? と質問し、I will go to ... と答えさせた。誤りではないが、むしろ Where are you going? [Where are you going to visit?] などの be going to を使う場面である。また別の実習生はメインとなるペア活動のなかで Will you go swimming next summer? などの will の文と Are you going to go to bed early tonight? などの be going to の文を混在させ、機械的な口頭練習を行わせた。これでは will と be going to の違いを意識することにならないし、Will you ...? というのは予定を聞いているのではなく、その場で誘っている・依頼しているようにも聞こえるかも知れない。

Murphy (2012)による *English Grammar in Use (4th Ed.)* には will と be going to の使い分けに関連して、対話の空所を適切な方で埋めさせる次のようなエクササイズがある (p.47)。こういった例も参考にして、自然な活動を行わせたい。

A: Oh, I've just realised. I haven't got any money.  
 B: Haven't you? Well, don't worry. [ I / lend ] you some. (正解は I'll lend)  
 A: I've decided to repaint the room.  
 B: Oh, have you? What colour [you / paint ] it? (正解は are you going to paint)

以上の3つを総括すると、実習生はある文法形式の表面的な操作は理解しているものの、その文法形式が現実的に、語用論的にはどのような場面で使われるかという点に関する理解が不十分な場合があるようだ。この点の補強が今後の我々の課題である。

#### 4.5 その他

表1の「English あいうえお」とは静(2009)で紹介している発音指導の小技で、たとえば「v あ v い v う v え v お」のように、特定の英語子音音素を日本語の母音と組みあわせて発音するトレーニング法である。10件中4件でこの小技を活用していた。このトレーニングは日本語としては滑稽に聞こえれば聞こえるほどインパクトも効果もある。実習生によっては発音の「大げさ度」が不足している場合があった。

#### 4.6 直後の講評

講評の形態は、パターン (A) が3件、パターン (B)

が2件 パターン (C) が2件, パターン (D) が2件であった。パターン (A) の3件中, 2件には校長先生まで同席され貴重な講評をくださった。どちらの場合も英語以外の教科を専門とする管理職だったが, 教科を超えて当てはまる生徒との接し方に関して実質的的確を射たアドバイスをいただくことができ, 感謝している。

## 5. 今後への示唆

今回の10件の授業観察を通じて得られた, 今後の我々の教員養成に関する示唆・教訓は以下の通りである。

### <歌>

実習生は歌の一斉指導に関しては概ね効果的に行うことができる。その反面, 生徒がうまく歌えない(音符に歌詞をシンクロさせることができない)時に, 音符と音節の対応という根本原則に立ち返ることまではできないようだ。この点を今まで以上に指導する必要がある。

### <グルグル>

グルグルに関しては, (1) 十二分な一斉指導の後にくるべきものであり, (2) 机を移動するなど物理的環境を整え, (3) Read and Look Upを原則とし, (4) 教師が目の前に立った瞬間に生徒は発話を始めることを鉄則とし, (5) ひとりにかかる時間は5~6秒を目指すべきである, ということを再度, 徹底させる必要がある。

### <FB>

発表に対するFBに関しては, (1) まず必ず行うこと, (2) 生徒の発話を途中でとめてでも即時的に行うこと, (3) 発話が終わった後に行う場合であっても拍手をしたり, 着席させたり, 席に戻したりした後ではなく, まだ発表が続いているという雰囲気がある段階で行うこと, (4) 不十分な点を指摘してモデルを示すだけでなく, その場で当該生徒に言い直させ, 可能な限りその場で修正できることを確認すること, (5) 発表自体を授業の最終段階に設定せず, 中盤に一度行い, 修正フィードバックを経て, 向上した状態を授業の最終に持ってくること, (6) 最終段階で計画し, 結果のパフォーマンスの質が不満足なものであれば, 不満足であるから次回以降の授業でさらに努力する必要があることを伝えて授業を終える, なども恐れずに行うこと, を再度伝えてゆきたい。関連して(7)発表者を選ぶに際しては自発的な挙手を待たず教師がバランスを考えて指名したほうが効率的かつ効果的な場合が多い, ということも伝えたい。

### <英語そのものの理解>

今回気づかされた最も大きな課題は, 実習生の英語理

解を深化させる必要がある, ということである。それは低頻度語を含めた語彙サイズを拡充するとか, 難解な構文でも読みとけるようにするとか, TOEICに代表されるような熟達度テストのスコアをあげるとかいうことではなく, 中学で学習するような文法事項, たとえばwillやbe going toやThat is...や現在完了がどのような場面でのどのような使い方をするのが自然なのか, といったことに対する理解を深める, といったことである。

英語の教え方でなく, 英語そのものについてどこまで教科教育法(英語)でケアできるのか, またケアする必要があるのか, という問題にもなるが, 現実にその点が不十分な授業がある以上, 誰かが何とかしなければならぬ。不十分な授業を本物の生徒相手に展開させるわけにはいかないのである。

## 引用文献

- 静哲人(2009).『英語授業の心・技・体』研究社。
- 静哲人(2016a).新科目「英語教育学入門A」に対する学生の自由記述コメント:「歌う」授業はどうとらえられたか.『外国語学会誌』第45号, 65-79.
- 静哲人(2016b). 英語を英語で教える手法を提案する(1): 教育実習生の「多重知能理論」に関する文の説明をたたき台として.『大東文化大学教職課程センター紀要』第1号, 77-85.
- 静哲人(2017). 英語を英語で教える方法を提案する(2): 教育実習生の「音楽抑揚療法」に関する文の説明をたたき台として.『大東文化大学教職課程センター紀要』第2号, 117-126.
- 静哲人(2018).大東文化大学英語学科における中学・高校英語教員養成: 緊密な協働による教員免許の質保証の試み. 大学英語教育学会第57回国際大会(仙台・東北学院大学)2018.8.30 大会発表要綱 p.114.
- 静哲人(2019). 英語発音改善のためのメール・グルグルの長所と限界: 対面グルグルとの比較において.『外国語学研究』第20号, 3-10.
- 静哲人・淡路佳昌(2017). 教育実習訪問指導による英語授業改善の検証: 録画ビデオ分析によるケーススタディ.『大東文化大学教職課程センター紀要』第2号, 127-138.
- 静哲人・淡路佳昌(2019). 小学校教員対象の英語発音ワークショップの効果: 質問紙および録画映像の分析『語学教育研究論叢』第36号, 1-20.
- Murphy, R. (2012). *English Grammar in Use (4th Ed.)* Cambridge University Press.

## 資料1：JRA フォローアップ課題

### 【発音編】

次の文章の音読を録音して送っててください。

<担当：静>

送付先：shizuka@ic.daito.ac.jp

(1) Ghana produces a lot of cacao beans. (2) They're made into chocolate. (3) Many people work on cacao farms in Ghana. (4) But the beans are sold at a low price. (5) They work hard, but they can't earn enough money.

1 まず(1)の文を録音してファイルに保存する。ファイル名：cacao\_自分の氏名\_1.m4a

2 静に添付ファイルで送る。件名：cacao\_1.1

3 静からマルの返信が来たら(2)の文に行く。マルと書かれなかったらそのFBに従って発音を修正し、また録音してファイルに保存する。ファイル名：cacao\_自分の氏名\_1.2.m4a

4 静に添付ファイルで送る。件名：cacao\_1.2 本文には、何を修正したか必ず書く(～の～が～にならないよう気をつけました)。

5 これを5つの文について繰り返し、5つすべての文についてマルがでるまで続ける。(マルがでない場合はファイル名の末尾の番号が増えてゆくことになる)

6 すべてマルがでたら、どういうFBを受けたか集計して提出してもらうので、FBは消去しないこと。

※ひとつめの文にマルを貰う前に、次の文の録音を送ってはならない。必ずマルをもらってから次の文の録音を送ること。

### 【FBについて】

FBはメール本文で、R、L、THなどと最低限で返す。それぞれの意味は以下の通り。

Rまたはr：Rの発音

Lまたはl：Lの発音

THまたはth

B/V：bがVになっている、またはvがbになっている

F：fの音をhと言っている

アー：farmをfirm, hardをherd, 逆にearnをarnなど、特に「アー」にあたる母音がまずい。

オウ：lowをlawと言っている。

シュワ：あいまい母音schwaを使うべきときに使っていない

アクセント：語のアクセントが間違っている

発音：語の発音が間違っている(例：chocolateを「チョコレイt」と言っている)

Nまたはn：語末などのNを発音していないためリンク

ングしていない

期限 2/7～2/17(日)この期限のうちで、できるかぎりすべて合格すること。ただし2/11～2/14については静は日中はメールチェックはできないので、FBサイクルは遅くなるので、あらかじめ承知してください。

### 【発問編】

課題文の内容に関する質問と応答を書き、提出してください。<担当：淡路>

送付先：授業HPに設置された特別コース内にある、QAフォーラム

1. 授業HPにログインし、「JRA フォローアップ 2018」に入る(対象者はコースへ登録済み)。

2. QAフォーラムを開くと、異なる文章についての課題が5つ用意されている。

3. 番号の若い順に取り組んでいく。ひとつの課題にすべて合格してから次の課題に取り組む。

4. 課題レッスンに出てくる文について、指示された文の下線部が答えの中心となる英語の質問と、生徒が答えるべき文を返信として投稿する。その他、(Yes/No)など特別な指示がある場合は、それに応じた質問を作る。

5. 返信には指示された文をすべてコピー&ペーストし、実際のQAは各文の下に挿入していく。

6. 行を挿入すると自動的に番号がついた行となるので、タブキーでインデントしてQAを書く。このとき下線が正しく貼り付けられない場合は、手動で下線をつける。

例)

Ghana produces a lot of cacao beans.

Which country produces a lot of cacao beans? -- Ghana does. Ghana produces a lot of cacao beans.

7. 生徒の回答では、代名詞にすべき所などにも配慮し、short answerに続けて、long answerも言わせる想定で書く。

例) Does Ghana produce a lot of cacao beans?

→Yes, it does. It produces a lot of cacao beans.

8. ひとつの課題が終わったらFBを待ち、修正が必要な箇所を返信の形で再度投稿する。

9. 合格という判定が出たら、次の課題に取り組む。

10. 会議などの業務が入っているときはFBまでに時間がかかる場合がある。

11. すべての課題を2月28日までに完成すること。